

## 人生の意義

やすらぎ

この世で真に生きると言うことは、不動の安ぎを得ることによつて始ります。動かすことの出来ない安心のないところには、真に生きると言うことは成立しません。

まことに人生の現実には苦悩や矛盾に満ちております。雨あり風あり、一時として静かであることなき生死海であります。その中であつて、何によつて安らぎが得られるのであります。

世間をじつと見渡せば、時に悪人世にはびこり、狂暴世に横行して、弱肉強食、天日も為に曇るが如くであります。

ここにおいて、強者は万人を虐げて、己の五欲の満足の為には悪魔となつても、外へ外へと、安らぎを外に求めて、押し通そうとします。弱者は世の片隅に敗惨の身を横たえ、怨恨の涙を流し、自暴自棄の齒を食いしばり、愚痴の幽霊となつて墓場に急いでいます。

ああ、かゝる生死海中に果して安らぎがあるではありませんか。

この一点

しかるに法界は決して支離滅裂な無秩序なものではありません。

何故ならば、船に一つの中心点があるが如く、地球に地軸があるが如く、月冲天に懸るが如く、法界に一つの中心点があるからであります。如何に怒涛狂乱、無明の波、一天をうつも、この一点を破壊することは出来ません。大火大地をなめつくすも、この一点を焼くことは出来ません。如何に六道輪廻の悪衆生、貪愛瞋憎の雲霧を吐いて天を覆うも、この一点を曇らすことは出来ません。

万物諸行無常の鉄則にしたがつて、火宅の無常界に流転生滅するも、この一点のみは流転せず、有為転変を越えて、常住不変であります。一点とは、そもく何であります。

過古において増さず、未来において減ぜず、拡がつては三千大千世界に充滿し、顕現しては、一衆生の心内に光ります。自覚大信念を成就します。

一点とは何でしょう。久遠の古にもこの一点のみ光り、現在もまたこれのみ輝き、尽未来際の後もまたこの一点のみ不滅であります。

如来

一点とは何ぞや。曰く「真実」であります。

「真実」は一切衆生の上に働きかけて衆生の上に輝きはしますが、しかし真実はそれ自体独立して、一切を超えて三世を貫き、恒沙無量の諸仏菩薩を誕生せしめて、闇の世の灯となります。

尽十方無碍光と言うも、これであり、無量寿と云い、真無量と云い、真実明と云い、大慈悲と云い、清浄光と云い、歓喜光と云い、智慧光と言うも、すべてこれ、金剛不壊の真心、即ち如来心をさすのであります。

一切を超えて不滅に輝くこの真実に通ぜずして、何をもって生きると言うことが成り立ちましょう。この常恒不変の真実を基調とせずしては、人生はただ悪夢の連続であり、虚偽のみおどるそらごとの世界であり、ついに虚無であります。この故に、古の聖人は必ず、世間千万の雑音を超えて、至心にこの如来の真実に生きました。

凡夫

自己の迷妄を迷妄と知らず、  
他人の迷妄を迷妄と知らず、  
迷妄、迷妄の中に生きて、迷妄を迷妄と知らず、  
貪欲をもって人を見、瞋恚をもって人に対し、愚痴をもって人を計ること、  
これ凡夫の正体であります。

己に真実なきを知らずして、他人に真実を求め、求むべからざるに求め、頼むべからざるに頼んで、いよいよ深き暗黒に沈むこと、暗夜、暴風雨の中に、難破する船の如くであります。かゝる生死海には、安心なく不動三昧の境はあり得ません。

もしそれ、かかる世界に、耳をおおい、眼をかくして、安心なりと言うものがあるならば、それは貪欲の一時の仮想にすぎません。何か一つ事件が見舞えば、根こそぎ滅されます。

そして又、現実の世界は、無明の暗におおわれて、虚偽や、我慢や、策略や、悪逆や、誤解等々で動かされています。こうしたものの中で心を安らかに歩みきると言うことは、あり得ないことであります。そうした一切の迷妄を超えて久遠の真実に通うてのみ、そうした暗の中をも悠々と、如来の招喚のまゝに歩みきることが出来るのであります。凡夫が凡夫だけでは決して生きると言うことは成立ちません。

念仏の世界

しかるに世に人があります。無明の黒暗深ければ、深いほど、いよく、その人格の光輝を増し、怒涛狂乱、波たちさわげば、いよく、不動三昧に住して、静かなること大船の如く、迫害、攻撃、貧困、不幸等々の苦悩の一切を超越し、名利をもって誘い、財力をもって誘惑し、権勢をもっておびやかすも、ついに動かず、一道を進んで退かぬ人があります。

たとえば親鸞聖人の如き、何をもってかくの如く生きられたのでありましょうか。これ全く念仏の世界に安住したもうが故であります。

仏凡一体

如来は法界の中心であります。生きとし生きるものの畢竟依であります。常恒不変、無量寿なる生命そのものであります。真如一実の功德宝海であります。

この仏、即ち金剛不壊の真心であります。之に通ずる念仏の心もまた金剛不壊であります。

如来即ち諸行無常を超えたもうが故に、この心また無常を超えて常住であります。如来無漏清浄なるが故に、この心また無漏清浄であります。

如来心に生かされる者は、真実に生かされるものであるが故に、真実自体の徳として、内にたのむ所があり、自ら安んずる所があります。如来心のうちにのみ寂靜安穩があります。かくて仏凡一体の自証は、ついに人生の本質的解決であります。

念仏の子は

念仏の子は如来に生きる。

迷妄を迷妄と知って、迷妄をたのみず。真実を真実と知って、如来の真実をたのみず。

たとえ世間が己を知ってくれず、誤解のただ中におかれても、一切の雑音を超えたる如来招喚の声のままに一道を歩みきります。

虚偽がはびこり、煩惱の力が勝つが如く見えても、如来の本願力を信じ、念仏一道をにらんでたじろぎません。

濁悪巷ちまたに満ちて、天道是か非かと歎ぜずにはいられぬ矛盾の中にも、自暴自棄せず、沈黙して肅々と彼岸への真実一道を行歩します。

つとめて報いられず、重き荷物の下敷に、縁の下の力持ちでこの世を終らなくてはならなくとも、何等の幸福が与えられなくとも、本仏の心を心として、信心歓喜、恩徳報謝の大道に乗托して、明朗を失いません。

如来この人を舞台として人生に輝きたまい、この人如来に生きて出世の本懐を全うします。

信は如来寂靜の一心と一体であります。これなくして泣く者も、これなくして笑う者も、すべて人生の本質に徹せぬものであります。

人生は如来によつてのみ深い不滅の意義が与えられます。